

[現代の「ダビンチ工房」MITメディアラボ]

次の時代つくる破壊的イノベーターは必要

「天才」をあまた輩出したイタリア・ルネサンス期。代表格のレオナルド・ダビンチ(1452~1519)は、メディアチ家などが支援するフィレンツェの「工房」で、ポッティチェリら異才と競い合い、多彩な才能を開花させた。

そんな「ダビンチ工房」と類似点が多いのが、米マサチューセッツ工科大学(MIT)の「メディアラボ」だ。

1985年の創設以来、キンドルなどに使われるEインク、ウェアラブルコンピューターなど画期的な発明を続々と世に送り出し、産業界から強力な資金援助を得ている。

ラボの客員教授を務めた慶応大学教授、中村伊知哉(57)は言う。「ラボが一つの磁場を構成し、とっぴな発想で何かをつくり出そうとする人たちが引き寄せられてくる」

「天才」が才能を開花させるのに適した環境とは何か。米東海岸ケンブリッジで4月、ラボ副所長の石井裕(62)に尋ねると、即座に否定された。

「スタジオとかアトリエがあれば、天才が

[メモ] MITメディアラボ

1985年、初代所長を務めたニコラス・ネグロポンテがMIT建築学部に、「人工知能の父」と呼ばれたマービン・ミンスキーら著名教授らと設立。途上国向けの100ドルパソコン、デジタル制御が可能な電気自動車などを次々と開発している。学問の縦割りを廃し、デザインと芸術、科学と工学を一体化。民間企業が主なスポンサーとなって研究を支え、研究の成果物をスポンサーは無償で利用する権利をもつシステムがある。

生まれるわけではありません」

石井はそもそも、「天才」という分類に違和感を抱くという。「優秀な人びとが切磋琢磨し、お互いに批判して鍛え合いながらアイデアや理念を研ぎ澄ませていく。それがやがて、人びとが天才と呼ぶ領域に達するのではないのでしょうか」

ラボには世界中から「逸材」が集う。手で触れられるデジタル情報「タンジブル・ビット」の研究で世界に知られる石井の研究室にも応募が殺到するが、面接試験などでふるいにかけて、採用は毎年2、3人。競争率は100倍にもなるという。

いったい、どんな資質が求められているのか。「独創的な発想ができ、きちんとアイデアを形にすることができ、さらにアート、デザイン、テクノロジー、どの分野でも楽しみながら異文化コミュニケーションできることです」と、石井。

そして、そんな人材を育むには、異文化に身を投じて異なった考えを持つ者と議論し、自らの考えを鍛えていくこと、すなわち「他流試合」が大切だ、と説く。

「正解のある問題を人より速く解くことだけにたけた人間は、正解のない問いを前に無力になる」

人工知能(AI)の時代。テクノロジーの進歩で生活様式は変わり、人びとは時代のうねりを肌で感じている。そんな時代と人材の関係を、石井はこう見る。

「新しい地殻変動の波にのまれるのではなく、自ら変化を起こして次の流れを創り出していく。そうした次の時代をつくるためのディストラティブ(破壊的)イノベーター(刷新者)は必要でしょう。ただ、それを天才と呼ぶ必

要はないと思う。いま必要なのは、オリジナルビジョン(未来図)を描けるビジョナリーです」

一方、ラボの学習研究部門の教授、ミッチェル・レズニック(61)も、「創造性」の重要性を説く。

「世界の変化はかつてなく早い。子どもたちは不確定で予測できない新たな状況に常に対処していかなければならず、創造的に考え行動することが、これまで以上に重要になっている」

彼の研究室は、「スクラッチ」と呼ばれる子どもでも使える簡単なプログラミング言語を開発。世界中で数百万人の子どもや教育者に使われている。

将棋や碁の世界にはしばしば、「天才」が登場する。が、そうした「天才」が世界にブレイクスルーを起こすわけではない。では、社会を変えるような、創造性には何が重要なのか?

レズニックはこう答えた。「最も大切だと思うのは、どうしたら各自が持ちうる創造性を十分に発揮できる機会を与えられるか、だ。創造性は、それぞれの生活や周りの人たちに、変化をもたらすものでいい。もしかしたらその中から、ブレイクスルーを起こす人が出てくるかもしれない。でも、より大事なものは、みんなに機会を与えることです」(丹内敦子)

「2200年を生きる人たちに何を残したいかを考え、形にする。そのとき重要になるのはアートや哲学だ」

アート、哲学の大切さについて

石井裕 Ishii Hiroshi
MITメディアラボ副所長



6歳の時、女帝マリア・テレジアから下賜(かし)された大礼服を着たモーツァルト。モーツァルト7歳の時の演奏を聴いたゲーテは、成人後の彼について「絵画のラファエロ、文学のシェークスピアに匹敵する才能」とたたえた。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
Wolfgang Amadeus Mozart
1756~1791
Getty/共同通信イメージズ



私自身、若手の演奏家とベテランの大家がコンサートで共演する機会を作ろうと努力しています。演奏会という真剣勝負の場で「本物」と対峙(たいじ)することで、突然資質を大きく開花させる若手が現実に存在するからです。人との出会いを自ら生かせるかどうか、

「天才に育つ」条件の一つでしょう。(聞き手・太田啓之)



中野雄(なかの・たけし) 1931年生まれ。東京大学法学部で丸山眞男に師事し、日本開発銀行を経てオーディオメーカーケンウッド代表取締役、ケンウッドUSA会長を歴任。現在は音楽プロデューサーとして多くのコンサートやCDの制作に携わる。

環境が開かせる「天才」

「天才」に対し、私たちは「生まれつき常人とは隔絶した存在」というイメージを抱きがちだが、本当にそうなのか。

アインシュタインは学校が大嫌いだった。一方で、10歳の時に叔父が「代数はxという動物を捕まえる狩り」というたとえ話で数学の魅力を教えてくれた。家に出入りしていた医学生は幾何学を教え、「光の速さは常に不変」という後の相対性理論につながる科学書を与えてくれた。これらの出会いなしに、アインシュタイン少年が「天才アインシュタイン」になるのは難しかったかもしれない。「天才」とは、実は天賦の資質だけではなく、「その資質を100%開花させる生育・教育環境に恵まれた人々」のことではないか。

人がその才能を十分に伸ばせる子育て、教育方法とは何か。現代の学校教育はその条件をどの程度満たしているのか。さまざまな事例や取り組みを通じて考えた。(太田啓之)

『「後でね」と言った瞬間、子どもの『知りたい』という好奇心を殺してしまう』

子どもの「なぜ?」について

中原浩子 Nakahara Hiroko



[中野雄氏に聞く]

モーツァルトは「父親の作品」

常

人とは隔絶した能力を持つ「天才」はなぜ生じるのか。長年、音楽の世界に身を置きつつ考えてきました。

作曲家ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの天才性の証しとして多くの人が挙げるのは、その早熟ぶりです。5歳で作曲を始め、6歳で女帝マリア・テレジアに演奏を披露するなど、枚挙にいとまがありません。

実はクラシック音楽の世界では、モーツァルト以外にも「神童・天才伝説」は結構存在します。現代の指揮者・ピアニストのダニエル・バレンボイムは、5歳でピアノを始めて7歳でリサイタルを開催。モーツァルトより後の時代の作曲家・メンデルスゾーンやビゼーが17歳の時に書いた作品は、同時期のモーツァルトの作品の水準を上回っています。

天賦の才では上だったかもしれない彼らよりも、モーツァルトがはるかに抜き出ているのはなぜか。

私は、モーツァルトを「父親レオポルドが心血を注いだ作品」と考えていま

す。レオポルドは息子の中に尋常ではない音楽の才能を見だし、その才能に磨きをかけ、宮廷社会に売り出すために、5歳の頃から欧州中を旅させた。大抵は「親バカ」で終わってしましますが、レオポルドの目は正しかったのです。

幼い頃から公衆の前で演奏して場数を踏んだこと、旅先で受けた一流の音楽家たちの教えが、モーツァルトの才能を開花させる上で決定的な役割を果たした。レオポルド自身、バイオリンの有名な教則本を執筆するなど、教師として優れていたことも見逃せません。才能の5~6割は遺伝的資質で決まるかもしれませんが、「環境」と「運」という要素を抜きに天才を語るのとは不可能です。

そして、モーツァルトは25歳で父親と決別し、ウィーンで独立した作曲家として活動を始めます。この時点を境に、モーツァルトの音楽は別次元の芽えを見せ始める。「師からの決別と自立」という決断も、才能の開花には必要です。

政治思想史学者で、クラシック音楽への造詣(ぞうい)が深かった丸山眞男